

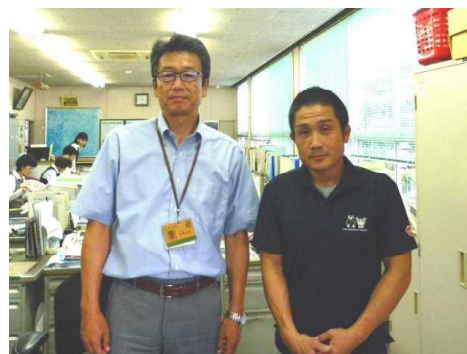
**農産物の一大生産地を支える心配りの行き届いた水管理**

～荒川中部土地改良区 場長 石澤 <sup>いしざわ</sup> 章<sup>あきまさ</sup>氏～ 埼玉県深谷市ほか

今回「水土を守る人々」で紹介するのは、荒川中部土地改良区で場長を務める石澤章<sup>よりいまち</sup>さんです。荒川中部土地改良区は、埼玉県の深谷市、本庄市、大里郡寄居町にまたがる約3,400haの農地を受益とし、国営・県営等で造成された揚水機場18箇所、幹線用水路約49km、排水路約25.6kmを管理しています。当地域は全国でも有数の畑作地帯であり、深谷ねぎをはじめ、ホウレンソウやブロッコリー等の市町村別収穫量が全国で上位に位置している他、ユリやチューリップなどの花卉類の栽培も盛んで大型ハウスによる周年栽培が行われています。このような多彩な地域農業を支えている石澤さんに話を伺いました。

**1. 多岐にわたる業務**

石澤さんは、土地改良区に勤めて20年目。主に農業用水利施設の操作・管理、水利調整等の現場業務に携わってきました。現在は当該地域の主要施設である花園揚水機場の場長として現場業務に従事しています。休日には地域の子供達に柔道を教えていて、がっちりとした体型の体育会系ですが、物腰が柔らかく優しい人柄がにじみ出ていて、頼れる存在といった印象の方でした。



荒川中部土地改良区  
佐藤所長（左）と石澤場長（右）

そんな石澤さんの業務はこの地域の農業と同様、多岐にわたります。

日々の業務では、地域の多彩な営農に対応した通年用水の適正配分と安定供給のために、基幹・末端水利施設の見回り（灌漑期は毎日午前・午後の2回）、スクリーンのゴミ上げ、用排水路脇の除草作業や畑地かんがい施設の修理・点検等を、石澤さんを含めた4名の職員で行っています。

特に、水路の大部分が開水路で水管理システムが整備されていないため、過去数

年分の水位データを元に各ブロックの水管理をゲートの機側操作により行う必要があります、全53箇所の取水ゲートの機側操作や天候による水位調整は大変だということでした。

このため見回りに際しては、代々受け継がれている確認ルートがあり、チェックすべき水路のポイント等を効率的に回ることができるということです。地区内の市街化が進み、水利施設周辺に住宅や学校が隣接していることから、水路への転落防止用フェンスの状態を確認したり、農業用水路で釣りをしている人等がいると、「子供が真似すると危険なので、ここではしないよう」注意したりする等、安全面に十分配慮して見回りを行っているとのことでした。

そのほか、組合員の負担を減らすために、落雷等で揚水機場の操作盤のリレーが故障した際は自ら復旧作業を行い、畑地かんがい施設の配管が漏水した際は自らバックホウを運転操作して新管に入れ替える等、可能な限り職員で対応しているとのことでした。そのため、土地改良区職員が皆で電気工事士の資格や建設機械の運転免許を取得できるよう、職員の技術力向上に努めているとのことでした。また最近では、末端水路の管理を行う農業者が高齢化し、何とか土地改良区に連絡が入る機会が増えたとのことでした。できる限り力になりたいとの思いから、連絡があったら直ぐに駆けつけているとのことでした。



職員による水路補修



企業等と連携した植栽活動

また、日々の施設管理や水管理の傍ら、地域用水機能（親水・景観機能）の維持保全活動として、自治会や企業と連携して水路法面にイワダレ草やアジサイの植栽を実施しています。石澤さんは、これらの活動の企画調整をはじめ、自治会や企業等への営業、地方新聞や市報、公民館だよりへの活動報告の投稿等、広報活動にも力を入れています。

さらに、地域内の団体に取り組んでいる多面的機能支払交付金の活動においても、要請があれば施設の機能診断や目地補修等の簡易な補修方法について助言を行う等、多岐にわたる業務を精力的かつ、きめ細やかに取り組んでいます。

## 2. 組合員が安心して営農できるように

日頃から心がけていることは、組合員から連絡があった際は、電話で済まらず、現地に赴き直接話を伺うことでした。はじめは水が来ない等と怒っていた人でも、顔を合わせ、相手の話を聞き、しっかり話し合えば、次回からは気軽に話しかけてくれるようになることでした。「組合員が安心して営農できるよう、組合員との良好な関係を構築し続けることを大切にしたい。」と語ってくれました。



大事な水位データ

今年は荒川水系が取水制限となり、節水対応が求められました。水が来なくなるのではないかと不安になる組合員に対し、水量は減るが必ず送水するという通知を早期に行い、過去の取水制限時の水位データに基づく水管理を確実に行うことで、混乱することなく乗り切ることができたとのことでした。日頃からデータの蓄積や組合員に寄り添った対応の重要性を改めて実感したとのことでした。

そして、収穫後に組合員から「今年もたくさん収穫することができた。ありがとう。」と感謝の言葉をかけてもらった時に、一生懸命取り組んできて良かったなと、やりがいを感じるとのことでした。

## 3. 今後の取組について

石澤さんが今後の課題として意識していることは、組合員の高齢化や減少、地域内の市街化が進む中、地域の農業を守るために、いかに農業用水と水利施設を次世代に継承していくかということでした。その取組として、「まずは非農家の協力を得ながら地域で水利施設を守っていく体制を仕組むことを考え、近隣小学校と連携した活動や地域内の産業祭に参加する等して、子供達をはじめ、広く地域の人達に土地改良区や農業用水について知ってもらうことから始めたい。」とのことでした。

そして、「埼玉県内で有数な農産物の一大産地の営農を守るべく、使命感をもち、水が来なくて困ったという人をださないため、末端まで確実に水が行き渡るようしっかりと務めていきたいです。」と優しく語ってくれました。

## 4. さいごに

上司である佐藤所長に石澤さんについて伺ったところ、「石澤場長は、真面目で責任感が強く、頑張り屋。現場のことは全て任せており、頼りにしている。近い将来、土地改良区を担っていく人材であり、期待している。」と激励されていました。また、当該地域で実施中の国営農業水利事業所の担当者からは、「工事による通水制限の調整等において、石澤さんから全面的に協力を得て、とても助かっている」との声がありました。

取材の帰り道、ブロッコリー、ネギ、ポインセチア、ユリ等、元気に育つ多種多様な農産物や、水路を気持ち良さそうに流れる水を目にしました。荒川中部土地改良区の実直な皆様の心配りの行き届いた仕事で、この地域の営農を守っているのだと、少し目頭が熱くなりました。



大型ハウスによるユリの周年栽培



畑地かんがい施設が整備されたヤマトイモほ場



点滴かんがいにより一株ずつかん水されるブロッコリー

【関東農政局農村振興部設計課】